

この書は、郷土教育の一環として作成しました。郷土教育のねらいは、「郷土の歴史や伝統文化、自然や産業などを正しく学び理解し、郷土へ誇りと愛着を持ち、郷土の発展に貢献する心情を育むこと」です。

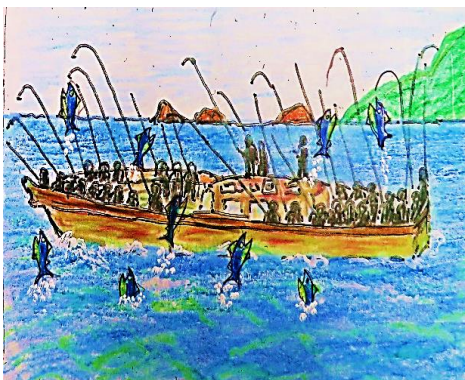
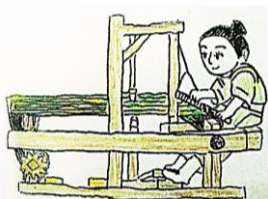
わたしたちの郷土奄美は、令和5年（2023年）に日本復帰70周年を迎えました。奄美の先人たちは一丸となり幾多の苦難を乗り越え、日本復帰の偉業を成し遂げ、今日の奄美を築いてきました。誇るべき歴史です。

しかしながら、奄美の子どもたちが学校で学ぶ歴史は、ほとんどが「ヤマト（日本）」の歴史です。もちろん、日本国民として大切な学習ではありますが、シマ（奄美）の歴史との関連を学ぶ機会が少ない感もあります。

そこで、教科書で学ぶ「ヤマト（日本）」の歴史とあわせて「シマ（奄美）」の歴史を学ぶことは、郷土教育の観点からおおいに意義があることと考え、「子どもたちにも分かりやすいように」と、それぞれの時代の代表的な出来事を精選してまとめたのがこの書です。

この書が皆様の郷土学習に少しでも参考になれば幸いです。

令和6年（2024年）10月
大和村教育委員会 晨原弘久



【ヤマト（日本）とシマ（奄美）の歴史】① 時代区分

【奄美博物館資料】

ヤマト（日本）	歴史区分	シマ（奄美）	シマの世	沖縄の世	年 代
旧石器時代	先史 				

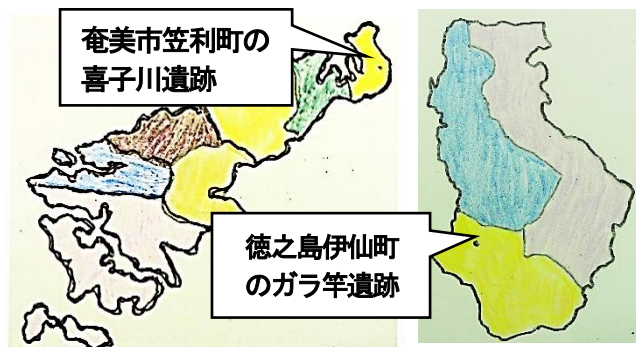
ヤマト（日本）とシマ（奄美）の歴史 ① 旧石器時代

今から数万年前、地球は氷河時代とよばれる寒い時代が続いていました。

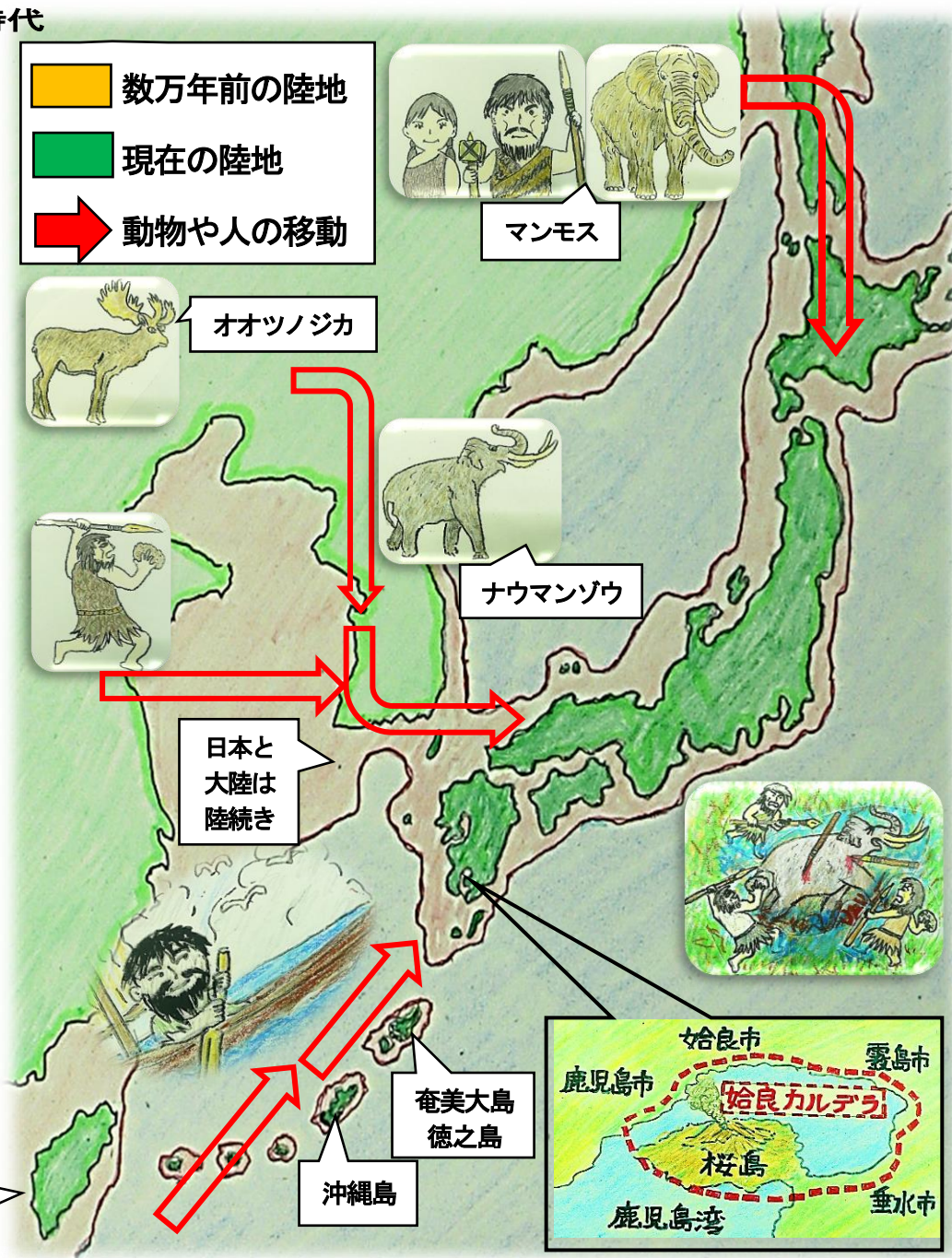
そのため海面は今より100mほど低く、日本列島は大陸（ロシアや中国や朝鮮半島など）と陸続きでした。そこをゾウやシカの群れが日本に渡り、それを追い大陸から人々が渡ってきました。また、この頃すでに島になっていた奄美・沖縄を通り南から人々が舟で海を渡ってきました。この頃の人々の主食はドングリやハシバミなど植物の実でしたが、黒曜石などの堅い石材で槍やナイフを作り、ゾウやシカなども獲物（食料）にしていました。

（注：奄美沖縄にはゾウなど大型動物はいませんでした。）

今から3万年ほど前、鹿児島県錦江湾の始良カルデラが大噴火しました。この時の噴火はすさまじく、日本列島全体に火山灰が降り積もり、奄美にも薄い火山灰の層が積まりました。この火山灰の層は、笠利町の喜子川遺跡や徳之島伊仙町のガラ竿遺跡などから確認されています。このことから、奄美群島では約3万年前から人類が住み始めていたことが分かります。



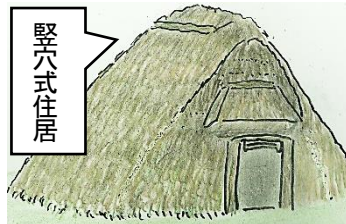
右図「日本の歴史」（ポプラ社）参考



【ヤマト（日本）の歴史】① 縄文時代～弥生時代～古墳時代

約1万年前、地球は暖かくなり海面が上がり、今の日本列島の姿になりました。

人々は竪穴式住居に家族で住み、ドングリなど植物食の他に、みんなで協力してシカやイノシシ、ウサギなどを狩り、海や川では漁をしていました。縄文土器と



竪穴式住居



みんなで狩りや木の実採集

いう縄目模様の土器を作り、食べ物を煮たり保管したりしていました。この時代を縄文時代といい、1万年以上続きました。

今から2700年ほど前ごろに九州で米作りが始まると、北は青森、南は鹿児島まで広まりました。人々は共同で大規模な水田を作りました。米作りと共に大陸から鉄器などが伝わり、日本国内でも一部で生産され、農具や武器も作られるようになりました。土器も縄文時代に使われた煮炊き用の深鉢と盛り付け用の皿の他にも、使い道に合わせて様々な器の形が作られるようになりました。これを弥生土器と言い、この時代を弥生時代と言います。



米作り始まる

食料が豊かになり人口も増えると、食糧確保や水田拡大をめぐるムラどうしの争いもおきるようになりました。人々はムラを守るための砦のような集落を築き住んでいました。そこから指導者が現れ、豪族となり王とも呼ばれ、幾つものムラをまとめ、小さなクニを築きました。中国の歴史書には239年（今から1800年ほど前）に、「倭（日本）には邪馬台国の女王・卑弥呼が30ほどの小国を治めていた」と紹介されています。

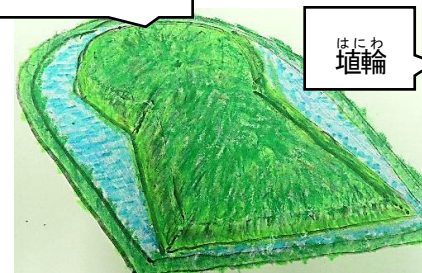


弥生時代のムラと土器

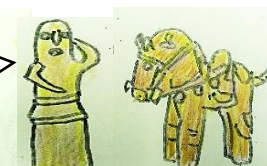
邪馬台国の女王・卑弥呼神のお告げを伝えていた

3世紀の後半ごろになると、大和（奈良・京都方面）の豪族たちが連合していきます。これを大和王権と呼びます。各地の豪族（王）たちの墓は前方後円墳と呼ばれる巨大なもので、やがて東南北部から南九州まで広がりました。古墳の中には王の棺や埴輪や宝物などが納められました。古墳を築くには優れた技術者と多くの労働者と権力が必要でした。豪族たちの連合の最高位につくのが大王で、大阪にある大仙古墳

前方後円墳

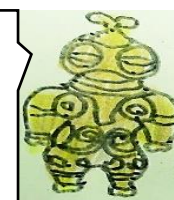


埴輪



土偶（縄文）

（仁徳天皇陵）は全長が486m、高さが35mもあり、世界でも最大級の墓です。この時代を古墳時代と言います。



【シマ（奄美）の歴史】①縄文時代～弥生時代並行期～古墳時代並行期

今から1万年ほど前に氷河期が終ると地球はだんだん暖かくなり、奄美群島も海面が数m上がり、陸地も奥の方にせばまり、そのため縄文時代の遺跡は今の海岸線の少し内陸側に分布しています。奄美群島では縄文時代の晩期頃（約3000年前）から人々が定住していたとされ、奄美大島では奄美市の笠利町にある宇宿貝塚や

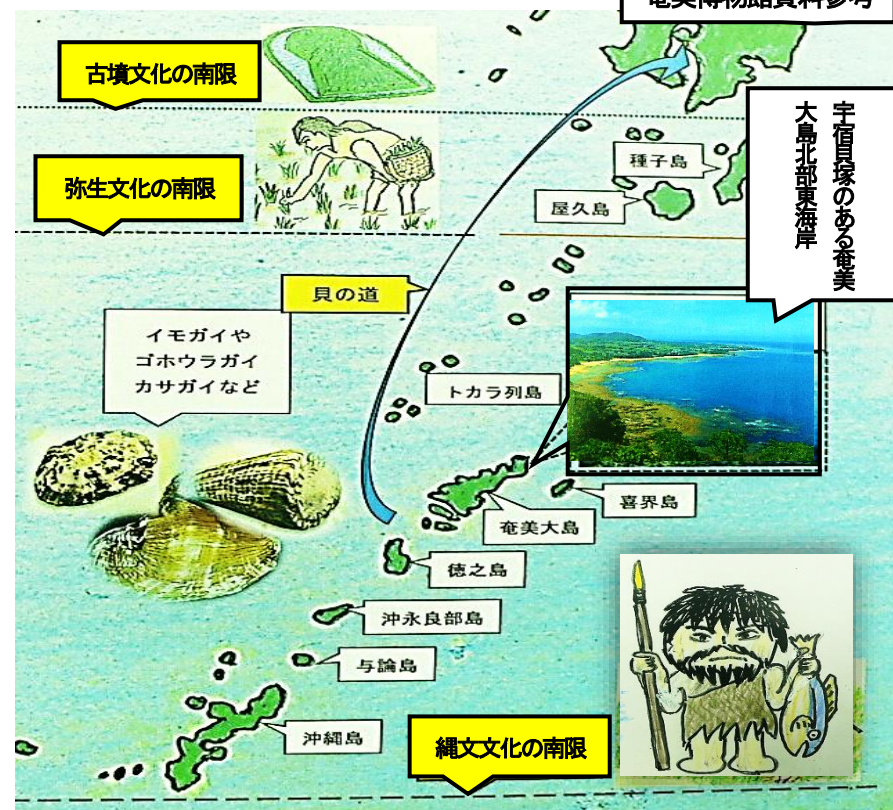
住用町のサモト遺跡などから、鹿児島県本土では見られない石積みで囲われた竪穴式住居跡が確認されています。さらに喜界島のハンタ遺跡、徳之島天城町の塔原遺跡、沖永良部島知名町の住吉遺跡、与論島の上城遺跡などでも同様の住居跡が見つかることから、奄美群島全体が九州の縄文文化の影響を受けながらも、晩期頃に集落遺跡が形成され、貝や石で作られた様々な装飾品が多く用いられた独自の文化を築いたと考えられています。奄美群島には、ゾウなどの大型動物はいませんでした。山でリュウキュウイノシシを捕獲し、シイなどの木の実をとり、海や川でウミガメや魚や貝などをとり食料としていました。

縄文時代の終わりから弥生時代の始まりにかけて、地球はまた寒くなり海面が低くなり、現在の海岸線になりました。そこで、奄美群島では弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡よりも海岸線に面した砂丘に多く分布しています。ヤマト（日本）では米作りが始まると人々は稲作に適した低地に集団でムラをつくり定住するようになりました。しかし、南の奄美群島や沖縄諸島では稲作など農耕の必要がないほど海の魚介類や山の植物食やイノシシなどの食料が豊富で、これまでの山での狩猟や海での漁労中心の暮らしでした。ヤマトで稲作の指導者がやがて豪族・王となり、連合国として大和王権ができます。その墓の前方後円墳は、鹿児島の大隅半島までで大隅諸島から南には広がりませんでした。しかし九州の豪族たちの腕輪など装飾品と呼ばれる物は、奄美群島以南に生息するイモガイやゴホウラ貝など大型巻貝を材料にしており、この頃の奄美群島はヤマトの政治的勢力と貝を交易する供給拠点だったと考えられます。



石積み囲いの竪穴式住居

奄美博物館資料参考



【ヤマト（日本）の歴史】② 飛鳥時代～奈良時代～平安時代

17条の憲法「人の和を第1にせよ。」

593年、聖徳太子は推古天皇（日本初の女性天皇）の摂政となり、豪族の力を抑え、天皇中心の国づくりが必要だと考えました。そこで、隋の国（中国）の進んだ制度や文化や学問を学ぶために小野妹子らを遣隋使として派遣しました。（これは後に隋の国が唐の国になっても遣唐使として続けられます。）そして、冠位十二階の制度で、身分や家柄に関係なく能力や功績で役人を任命し、政治を行う役人の心構えとして十七条の憲法を定めました。仏教を厚く信仰していた太子は、国の安定のため、法隆寺などを建て仏教の教えを広めました。太子の死後、有力豪族の蘇我氏が天皇をしのぐほど政治の実権を持つようになりました。そこで中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌足（後の藤原鎌足）らは、645年蘇我氏を倒しました。そして唐（中国）から帰国した留学生や留学僧らと共に、唐の制度を手本に政治や税の仕組みなどを整えました。これを日本初の元号「大化」にちなみ大化の改新と言い、この頃を飛鳥時代と言います。



聖徳太子

奈良の大仏と東大寺



710年、奈良に新しい都（平城京）が造られました。基盤のような整然とした道路で、役所も豪華になりました。しかし、地方の人々は税や労務で苦しい生活でした。さらに伝染病が広がり、多くの人が亡くなり、国中で災害や反乱が続発しました。そこで聖武天皇は仏教の力で社会の不安をしずめ、国を治めようと、741年に全国に国分寺を建て、都には東大寺を建てました。その中に座高15mほどの「奈良の大仏」が造られました。これには優れた技術と多くの労力とばく大なお金がかけられました。古事記や日本書記や万葉集も編纂されたこの頃を奈良時代と言います。

794年、都は平城京（奈良）から平安京（京都）に移されると、国の政治は有力な貴族たちが行うようになります。その代表格が藤原鎌足の子孫である藤原道長でした。道長は天皇を補佐する摂政や関白となり、娘を天皇の妃にし、権力と財力を強めていきました。位の高い貴族たちは寝殿造りの豪華な屋敷で和歌や蹴鞠などを楽しむ優雅な暮らしをしていました。その中で日本風の文化が生まれ、漢字からかな文字で、紫式部の源氏物語や清少納言の枕草子など優れた文学作品が生まれました。しかし、民衆は重い税や伝染病などで貧しく苦しい生活でした。この頃を平安時代と言います。



藤原道長

寝殿造り



紫式部

蹴鞠（けまり）遊び

飢えや病気に苦しむ民衆

【シマ（奄美）の歴史】② 古代並行期

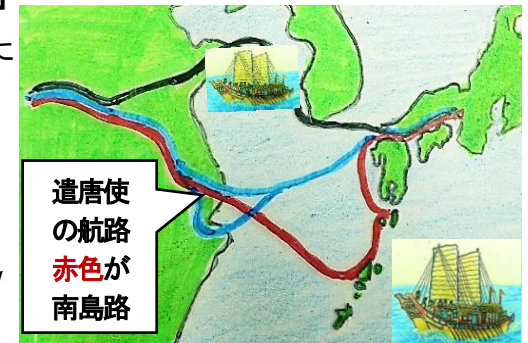
福岡県に学問の神様・菅原道真を祭る太宰府天満宮があります。ここから【■（木へんに奄）美嶋】と記された木簡が出土されました。これは奄美大島のことです。同時に【伊藍嶋】と記された木簡も出土されました。これは「イラン」との発音から「エラブ」と呼ばれる沖永良部島と考えられています。この木簡の上部左右の切込みから太宰府へ送られた特産品（赤木・ビロウなど）の荷札だと考えられています。



時代はこれよりも後世の平安時代になりますが、夜光貝は奄美以南が原産の高級な珍品で、ヤマト（日本）の有力者たちは盃に加工したり、また螺鈿細工などの豪華な装飾品にしていました。奄美群島はそれらを求めて人々が往来する一大交易地だったと考えられています。

【夜光貝】右写真⇒

奄美の名がヤマト（日本）の歴史書に登場するのは、「大化の改新645年」頃の【日本書記】に「海見島」と記され、その後に「阿麻美人」と記された記事です。第1回目の遣隋使は607年、この後の遣唐使は630年から894年まで続きますが、奄美の存在はヤマト（日本）で認識されており、遣唐使船が奄美群島にも寄港し食料や水などを補給したと考えられています。



この頃のヤマト言葉が現代の奄美方言に残っています。奈良時代に編纂された【万葉集】には、「〇〇の刀自」の表記があります。「刀自」とは「妻」の意味や夫人の敬称で、奄美では「とうじ」と発音されています。また、【竹取物語】では絶世の美女になったかぐや姫を「いと清らにて」と表現しています。この「清ら者」が奄美では「きよらむん」となっています。



現代日本語の「は（HA）・ひ（HI）・ふ（HU）・へ（HE）・ほ（HO）」の発音は、古くは「は（PA）・ひ（PI）・ふ（PU）・へ（PE）・ほ（PO）」と発音されていました。それが笠利佐仁集落と与論島に残っているのです。ここでは、

花を「PANA」、船を「PUNI」と言います。このP音は戦国時代・江戸時代にはF音（例：花「FANA」）に変化し

ていきます。つまり、現代日本語の「は行」H音は「P」⇒「F」⇒「H」と発音しやすい音に変化してきたのです。奄美方言は古い時代の言葉と発音を残す貴重な文化遺産です。誇りをもって奄美方言を受け継いでいきましょう。

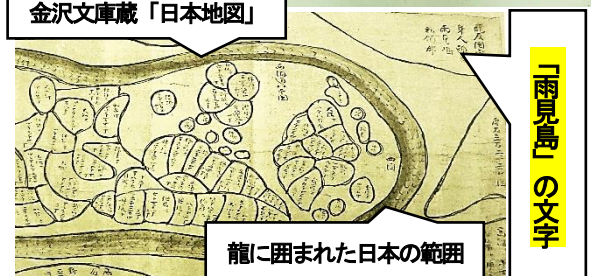
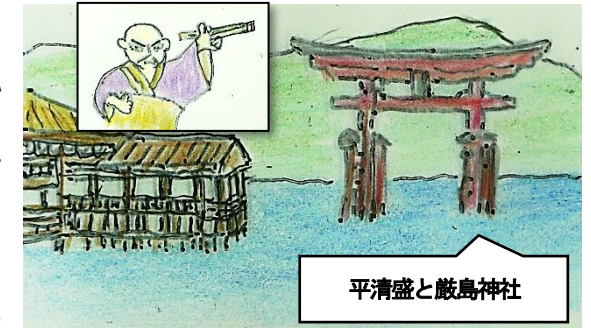
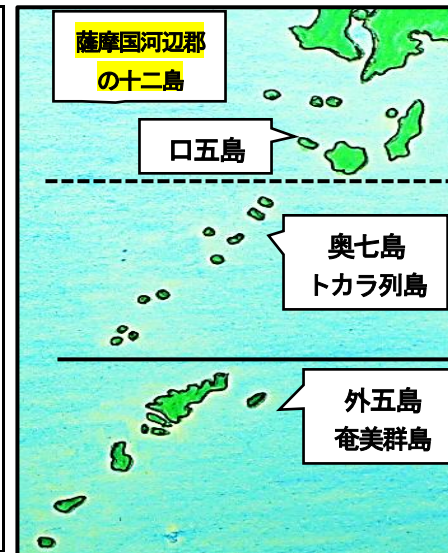


【ヤマト（日本）の歴史】③ 平安時代後期～鎌倉時代

都で貴族たちが優雅な暮らしをしている頃、地方では有力な寺社・豪族が田畑を広げ領地・莊園とし、富を蓄えていました。一部の有力農民は自分の領地を守るため武芸に励み、中には莊園に仕える者も現れ、やがて武士となりました。武士たちは一族で武士団となりました。その頭領が源氏（東日本）と平氏（西日本）でした。やがて源氏と平氏の争いとなり、はじめ平清盛を頭領とする平氏が勝ち、宋（中国）との貿易で繁栄・栄華を誇りますが、一族中心の政治姿勢が他の武士団や貴族から憎悪されます。関東の武士らの支援を受けた源頼朝は弟の源義経と共に平氏を滅ぼし、1192年、征夷大將軍となり武士による政治を始めます。これが鎌倉幕府です。

源氏の將軍は3代で絶えましたが、源頼朝の妻・政子の一族の北条氏が執権として政治を行いました。1274年、中国や朝鮮や東ヨーロッパまで支配した元という大帝国となり、日本の北九州に攻めて来ました。これを元寇と言います。元軍の火薬兵器などで幕府軍は大苦戦しますが、突然の暴風雨で元軍の船が壊滅し戦いは終わりました。しかし、この戦いは防戦だったため、幕府は武士たちに褒美を与えられず、武士たちも生活に困り、幕府への不満が高まりました。

鎌倉幕府は薩南諸島海域の管理体制を進展させていました。14世紀初め頃の「金沢文庫蔵日本図」には、日本の周りを龍が取り囲み、十二島（種子島・屋久島などの「口五島」とトカラ列島の「奥七島」）はその内側にありますが、雨見島（奄美大島）などは「外五島」と描かれています。雨見島（奄美大島）は幕府の所領ではなく、薩摩半島にいた幕府役人の私領にされていたことが分かっています。1188年、源頼朝は、キカイガシマに平家の残党がいるとして攻め、その翌年に奥州平泉を攻め、日本列島の南北に軍事行動を起こし、1192年に鎌倉幕府を開きました。



【シマ（奄美）の歴史】③ 平安時代後期～鎌倉時代

源氏との戦いに敗れ鹿児島・奄美に逃れてきたという「平家落人」伝説があります。平有盛は名瀬に、

平行盛は龍郷町戸口の神社に祀られています。また、平資盛は瀬戸内町加計呂麻島諸鈍大屯神社に祀

られています。島民に歌や踊りを教えたと言われ、現在も「諸鈍シバヤ」として受け継がれています。

「海見島・阿麻美人」として7～8世紀に日本の歴史書に登場した奄美群島は、し

ばらく記録が途絶えます。しかし、10世紀末（平安時代中期）の『日本紀略』に、

「キカイガシマ」として再登場します。11～13世紀頃（平安時代後期～鎌倉

時代）の遺跡として喜界島に「城久遺跡」が発見されています。この遺跡から九州産

や朝鮮高麗産や宋（中国）産の陶磁器（焼き物）などが出土しています。喜界島は南方

物産の交易拠点地だったと考えられています。他にも、宇検村の倉木崎海底遺跡から

12～13世紀の陶磁器が大量に発見されています。そして徳之島伊仙町では窯で陶器の

大量生産が行われ、窯跡が120余りも出土しました。このカムイヤキの制作技術は

朝鮮高麗産に由来し、日宋貿易の活発化と共に生産・流通が拡大し、徳之島を中心

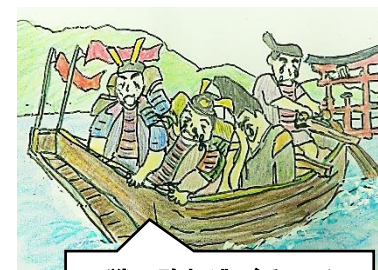
に北は長崎から南は沖縄与那国島まで広がりました。

これらのことから、「キカイガシマ」と呼ばれたこの時代、奄美諸島は沖縄から九州、

さらに中国や朝鮮半島との南方物産交易・人的交流の一大拠点地だったと考えられています。そして、この

頃から稲作農耕が始まり、鉄器も使われ、漁労採集から食料生産の時代になります。それと共に指導的役割

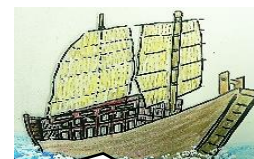
の者も現れます。喜界島の城久遺跡などからイネやオオムギ、アワなどの栽培の跡が出土されています。



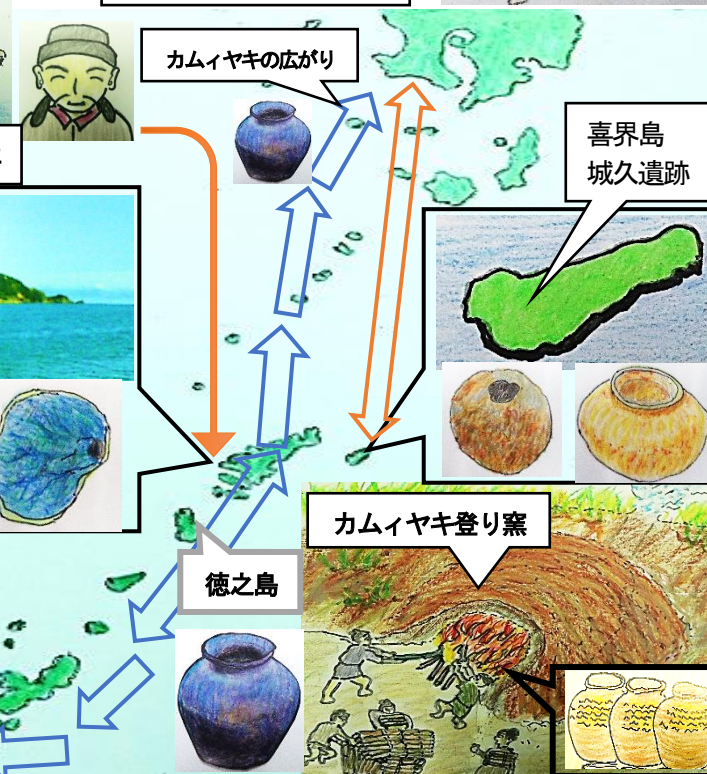
戦に敗れ逃げる平氏



諸鈍シバヤ



宋からの船が倉木崎に



宇検村倉木崎海底遺跡

カムイヤキの広がり

稲作始まる

協働作業



【ヤマト（日本）の歴史】④ 室町時代～戦国時代・安土桃山時代

鎌倉幕府の力が弱まると、政治の実権を巡り、朝廷や武士たちの争いとなり、1333年、鎌倉幕府は滅亡しました。はじめ後醍醐天皇が天皇政治を復活させます。しかし、貴族重視の政策に武士たちの不満が高まり、足利尊氏が武士の政治復活に兵を挙げると、後醍醐天皇の政権は2年で倒れました。尊氏が京都に立てた天皇（北朝）に対抗して奈良の吉野で後醍醐天皇も自分の正統性を主張（南朝）し、争いが続きました。この時代を南北朝時代と言います。尊氏は1338年、北朝から征夷大將軍に任命され、京都に室町幕府を開きます。室町幕府は3代将軍・義満の時代に明（中国）との貿易で栄え、農業も手工業も発達し生産力が高まりました。また、金閣寺や書院造、石庭などの建造物や、墨絵、茶の湯や生け花、能や狂言など、優れた文化・芸術が生まれ、現代に受け継がれています。



室町時代後期には各地で守護大名を倒し、一国を支配する者（戦国大名）が現れ、やがて領地拡大と全国統一の戦国時代が始まりました。その代表格が武田信玄や、上杉謙信や毛利元就です。その中でも織田信長は戦名人でした。長篠の戦いで鉄砲隊を編成し最強の武田軍の騎馬隊を撃破しました。その後、政治介入していた仏教勢力を排除する一方で、日本にきたキリスト教宣教師らを優遇しました。そして商工業者に自由営業させ、流通の妨げの関所の廃止など、様々な改革で全国統一に近づきました。しかし、統一を目前にした1582年、家臣の明智光秀の謀反で、本能寺で無念の最期を遂げました。その後初めて全国統一を成し遂げたのは、家臣の豊臣秀吉です。秀吉は1585年朝廷から「関白」に任ぜられ、諸大名に天皇の名で秀吉への服従を命じ平定していきました。秀吉の権力財力の象徴が壮大な大阪城です。秀吉は税の安定のため田畑の面積や収穫量を示す「太閤検地」や農民や寺社から武器を没収する兵農分離の「刀狩」を行いました。

